

2018年
11月26日
月曜日

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

キリスト教が繰り返し返し伝えてきた重要なメッセージは、イエスによって語られた「隣人を自分のように愛しなさい」という「隣人愛」である。そしてその「隣人」をめぐってさらに「愛敵」と呼ばれるイエスの教えが存在する。「愛敵」とは文字通り「自らの敵をも愛する」ことであるが、この教えを前にすると、自らにとつて実行可能なのか、という問いの前に私たちはたちまちのうちに立たされることとなる。

舟木 讓 教授 (キリスト教・宗教哲学)

本当に「敵」を愛するのはできるのか

様性に満ちた国際化が進められる条件が整ってきたと言えよう。

しかし、世界の現実にはむしろ逆方向に進んでおり、欧米で「自国」ファーストを声高に叫ぶ人々がリーダーとして選ばれ、多くの壁を掲げることが「自国」を守る最善策であるかのような雰囲気の世界を覆い始めていく。「敵」と「味方」をはっきりと区別し、「敵」に対しては容赦のない制裁を加え、「自己」と「味方」への露骨な利益誘導を行うことが「リーダーシップ」であるかのような錯覚が横行し始めていと言えよう。

そうした中で改めて「愛敵」の教えについて思いを致すとき、非現実的な理想にすぎないように感じてくる。国家間や民族間、あるいは異なる宗教間といった大きな関係だけでなく、日常の歩みの中で出会う多くの人々との関係をとつても、苦手な

人や、自らにとつて不利益をもたらしたり、負担を強いったり、あるいは性格や好み合わない人が必ず存在している。そうした身近な関係をとつても自らに対して、様々な形で「不利益」な状態をもたらす人を「愛する」ことは不可能であり、あるいは「愛敵」とは、自らの思いに正直でない「偽善」であると考えても不思議ではない。

冷静にそうした私たちの身の回りの現実や経験に立ち返る時、全く不可能な教えをイエスが語ったのか、あるいは現実には実行不可能な高邁な「理想」を単に掲げたにすぎないのかという疑問が湧いてくる。

そこで改めて自らにとつての「敵」とは何なのかという「敵」の本質を考えて見る時、「敵」も実は「私」と同じ本質を有する存在であることに気づくのではないだろうか。

か。国家・民族・宗教という大きな枠組みも、それを組織し、営んでいるのは人間である。そしてその人間の本質は何かというと、「不完全」な存在であることに改めて気づくはずである。常に完全無欠な行動と判断を行う人は、当たり前であるが存在はせず、常により良い社会のあり方、人間のあり方を様々な性格や個性、能力をもった人々が時に共感し、時に反発を覚えながらも共に協力し、歩んでいるのが人間や社会の端的な現実である。

そして、私たちは相手の存在を「敵」とみなして断罪する資格を本来有していないことを繰り返し謙虚に思い続けることが人間の最低限のたしなみである、ということを伝えるのが「愛敵」の教えであり、現在最も重要な視点ではないだろうか。

■